副助詞「も」の用法に関するおぼえ書き

Some Notes on The Usage of Adverbial Particle mo

守　屋　三千代

0．はじめに——問題のありか——

小稿は，次のような文に現れた副助詞「も」の意味・用法について考察するものである。すなわち，

例１　おかげさまで，この４月から私も社会人となりました。

例２　まったく，あいつも人が悪いね。

例３　君もよく言うねえ。

周知のように，「も」は同類，同質の他の要素の存在を明示，あるいは暗示しつつ，とりたてる用法をもっている。上例の「も」は先行研究にもあるように，この基本的な用法とは少々異なる意味を実現している。

もちろん，いずれも文脈次第では「社会人となった／人が悪い／よく言う」特定の誰か他者がいて，それと同様に「私／あいつ／君も～だ」と解釈することは可能である。しかし，この文は単独では，つまり特定の同じような誰かが明示されない限りは，「同様に私も／あいつも／君も」と述べていると解釈すると，むしろ不自然となる。

これに対し，次のように基本的な「も」の用法は必ずしも他者を明示する必要はない。

例４　香港ですって？　私も行きたい！

例５　あいつも結婚するんだって！？

例６　ええっ。君も追試なの？

例４～６の場合も「も」は他の同類が誰か，また単独か複数かも特に言語的に明示されていないが，それにもかかわらず，他の同類（それぞれ聞き手や話し手がまず想定できるが）とそれぞれ「私／あいつ／君」が並び取り立てられていると，自然に解釈できる。

問題は，おおまかに言ってしまうと，当該の用法——特殊な，周辺的な，暗示

的な用法とよばれることが多い——と基本的な並列的用法との連続的な記述が難しい点である。小稿はこの両者の「も」の連続的な記述の可否をめぐって分析を試みるものである。

さて，さきの例１～３であるが，この「も」を「は」におきかえてみると，それぞれ

例１’　おかげさまで，この４月から私は社会人となりました。

例２’　まったく，あいつは人が悪いね。

例３’　君はよく言うねえ。

となる。この例１’，２’，３’とさきの例１，２，３とを比べてみると，

①.「も」も「は」も文レベルでの主題を提示している点は共通すると思われる。

②. 例１～３の「も」は特定の同様の他者の存在を暗示しているわけではない，つまり同類の他者の存在をむしろ否定しているようなのに，例１’～例３’の「は」ほどには排他的なニュアンスをもっていない。もっとも，この場合の「も」は特定の同類の他者を否定しているのではなくて，該当する他者がいないということかもしれない。

③. 例２，２’と例３，３’は，いずれもマイナスイメージの意味で用いられている。このうち例２，２’の「人が悪い」の意味は例2の「も」の場合は他人への接し方が問題だという程度の軽い意味になるのに対し，例２’の「は」では「あいつ」の性格自体が悪いという文字通りの意味となる。このことは，主題が「も」をとるか「は」をとるかで，述語の意味の現れ方に違いができる可能性を示しており，それは本来の主題を表す「は」ではなく「も」の場合である点に注目できる。また，この点で，「は」が unmarked，「も」が marked であると考えられる。

④. 例３と例３’の「よく言う」はともにマイナスイメージの意味で用いられているが，ここでも，例３’に対し例３は排他的なニュアンスをもたないと同時に，「君」の話を聞いている話者が，話の流れを途中でさえぎらずに，コメントを加える感じとなる。これに対し，例３’では「君」に対して「ああ，そうなのか」と改めて認識し，それが新たな話題となる感じにさえなる。つまり「は」の方が談話レベルの焦点となる力が大きいと思われる。

⑤. 挨拶の文章としては，例１のほうが例１’よりもふさわしいよりもふさわしい感じとなるが，それは「は」であると，④でのべたように「私自身」を排他的に取り立て，かつ「私が社会人になった」という話題そのものが文脈の中心にすえられ，さらにそれに関する話が続く感じを与えるからかもしれない。

しかし，このことは例２，３，２’，３’についてもいえそうである。すなわち，例２，例３のような文が現れるのは，おそらく「あいつ」の噂話や「君」の話を聞き終わって一段落したという状況や，あるいはその文脈の途中で一言コメントを差し挟むような状況などであると思われるのに対し，例2’，例3’ではそこで一たん文脈の流れをさえぎって，「あいつ」や「君」のことについてのコメントを述べ，場合によっては新しい話題にすえる感じとなる。

上のように「は」と比べてみると，「も」の用法の記述には文脈レベルでの話題の取り上げ方も関わってきそうである。これをヒントにして，以下，先行研究を振り返りながら，分析を試みる。

Ⅰ．先行研究と記述上の問題点

ここでは，当該の「も」の用法記述に関する主な先行研究をまとめながら，それぞれがなげかけている「も」の記述に関する問題点について考えてみたい。なお，紙幅の都合上過不足なく論文をとりあげられないこと，そして各論文の趣旨を十分反映できないことを予めおことわりしておきたい。

まず，このタイプの「も」の用法を最初にとりあげたのは，松下大三郎『標準日本口語法』（1930中文館書店）である。（田野村1991による）松下は，次のように例をあげている。（以下，例文の番号は小稿の通し番号に準ずる）

例７　君もいくぢは無いなあ。

例８　日本人にも悪い奴がいるよ。

これらの意味，用法を，「不明確な他物との対比」と説明している。しかし「不明確な他物」というが，さきの例４～例６でみたように，基本的な用法も「不明確な他物」との対比において対象が取り立てられ得るので，この説明では十分とは言いがたい。

この点は，高橋太郎「『も』によるとりたて形の記述的研究」（1978『研究報告集１』国立国語研究所）でも指摘がなされており，この「不明確な他物との対比」に対して，例えば例８なら，「不特定であるにしろ，あきらかに外国人と対比されている」として，否定している。そして，この問題の用法を「含蓄をこめた文の主題提示」と名付けている。高橋1978では当該の用法に関して豊富な用例とともに分類がなされており，いろいろ重要な示唆が含まれているので，少々長くなるが引用したい。（下線は本文に従う）

ア）ある種の代表例：ほかのこともなりたっているはずであるが，ある例をだして，だいたいのようすをわからせる。

例9　明らかな進歩である農具の機械化も，農民には必ずしも喜ばれて居らぬことを駿介はみた。

イ）ふつう化：いままで特殊であったものが一般なみになることをあらわす。同類提示的な説明をすれば，特殊なものをふつうのものと同類として提示する。～

例10　辛かったことも，思い出となれば楽しく思われる。

ウ）状態がわり：いままで一定の状態をたもってきたものがその状態をかえることをあらわす。

例11　私の気持ちもいくぶん落着いてきた。

エ）推移主体の感動的な提示。

例12　その年も暮れに近づいた。

オ）マークしている時期がせまってくることをあらわす。

例13　もはや消燈時間もせまってきたので

カ）一定の感動をこめて，主題を提示する。

例14　S村もとんだ姥捨山になったものよ。

特定のひとが主語になったときに，よくあらわれる。

例15　わしももうずいぶん長く生きたからな

キ）一人称の意志，二人称の命令・すすめのばあいにもよくあらわれる。

例16　わしもすべての呪いを解いてこの世を去りたい。

この分類，列挙をみると「も」の基本的用法と接し，かつこの用法の特質に関わるいくつかのキーワードがあげられていることに気付く。つまり，「ある種の代表例」「同類提示的」「(いままでの状態の）状態がわり」「推移主体」「感動的提示」「(いままでに）マークしている時期がせまったこと」「感動的主題提示」などである。

問題はこれらの統合的記述の難しさである。高橋自身，本文中のこの記述のおわりに，「この報告では，いろんな意味のものを例示するだけで，分類せずにおわった。これはこの研究がまだいたらないからである。また，ここにあげたものでも，他の派生的な用法にまわしたほうがよいものも，おそらくは，いくつかあるだろう。」と述べており，ここまでさまざまな用例を収集し，分析しているのに，あえて統合を求めない方向にあるように感じられる点，この用法記述の難しさがうかがえる。ただ，高橋1978のこのキーワードと連続的記述について慎重な態度はその後の研究に影響を与えていると思われる。

例えば，寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』(1991くろしお出版）では，

寺村は問題の「も」の用法について「用法の可能性を記述するのにとどめている」。(田野村1991) すなわち寺村は,

例17 「その財布もずいぶん古くなりましたね」～

などの例をあげて,「昔から使われてきた『詠嘆』という言葉以外には適当な言い表しかたがないような情緒的な効果である。」と述べ,明らかに他の基本的な用法との連続性を求めていない。この記述に対し,田野村は,「かりに(例文が)『詠嘆』を表していると言えるとしても,それは表現されていることがらそのものの性質によるものというべきであって,『も』の働きによるものではないと思われる」とのべているが,この評は確かに的外れではないと思われる。

その田野村忠温「『も』の一用法についての覚書―「君もしつこいな」という言い方の位置づけ」(1991『日本語学』9月号VOL.10) では,この問題の「も」は,「『たての含み』だけを含む(C)の場合の一種である」としている。この「たての含み」というのは,田野村によると,次のような分類による。(A)は「雨が降った。雪も降った」のような「も」で,一般に基本的な意味の「も」というものに該当する。(B)は,雨が降った。南国にしては珍しい雪も降った」の「も」で,(A)のような単純な累加の意味だけでなく,予想しがたい事態が起きたことも表現するものである。そして問題の(C)は,

例18 このカレーの辛さにはインド人もびっくりした。

の「も」で,他にびっくりした人がいることを表すのではなく,びっくりするとは考えにくいインド人までびっくりしたことだけを表すものである。そして(A)を「よこの含み」,(C)を「たての含み」,(B)を「両方の含み」をもつものとしている。そしてこの(C)は「あらかじめ話し手の何らかの予想や思い込みがあって,それに反する事態を述べるのに使われているものと言うことができる」としている。そしてこの「話し手の思い込みが裏切られたということによって「詠嘆」的な面が助長されるということもあるかもしれないが,いずれにしても「不随意的な現象にすぎない」と加えている。

田野村は当該の「も」は要するに,予想しがたい事態がおきたことを表現するもの,としているが,これにも少し疑問がある。かりにこの考えをさきの例1～例3にあてはめると,それぞれ「予想しなかったことに私『も』社会人になった/あいつ『も』人が悪い/君も『も』よく言う」となり,いずれも「まさか私が社会人になるとはねえ/あいつが人が悪いとはねえ/君がよく言うとはねえ」という意味にはなりにくいし,その場合は「が」を用いるのが普通だと思われる。

もっとも,田野村の例文「インド人もびっくり」なら,この(C)の解釈は成

り立ちそうである。それは，カレーに関して「インド人」が「最もびっくりしないはずの立場」にあるからで，だからこそ「たての含み」だけを純粋に表すことができるのである。もっとも，田野村本人も「ここで述べた見方がそもそもどれだけの範囲の『も』の用法に適用されるものかということもあらためて考えてみる必要がある」と述べている。しかし，今問題にしているのは，田野村の言う「たての含み」を純粋に表す場合だけではないはずである。となると，いわゆる累加である「よこの含み」でも，ここでいう典型的な「たての含み」でもない意味とは何か，ここでもう一度ふりだしに戻ることとなる。

ただ，田野村の見方に含まれる点——あらかじめ話し手の何らかの予想や思い込みがあって——という指摘は，さきに引用した高橋1978のオ）「マークしている時期がせまっていることを表す」に同様であるが，確かに次のような点を説明するのに，有効である。例えば，

例18　時間もせまってまいりましたので，質問を打ち切りたいと思います。

の例文の「も」を「が」とすると，

例18'　あ，うっかりしていましたが，時間がせまってまいりましたので，質問を打ち切りたいと思います。

という発話時に「時間が迫っていることに気づいた」という表現となり，発話時前から気づいてきたという表現をすることができない。逆にいうと，例18を，

例18"　あっ，うっかりしていましたが，時間もせまってまいりましたので質問を打ち切りたいと思います。

とすると，上のような「も」の表現のためにやや不自然な感じとなる。これに対して，例18の「も」を「は」におきかえると，

例18'"　時間はせまってまいりましたので，質問を打ち切りたいと思います。

となり，発話時前から気づいてきた感じはあるものの，それまで，あるいは発話時から「時間」を主題とした談話が続く感じとなり，その結果あとの「質問を打ち切りたいと思います」という談話の焦点とそぐわない感じとなり，結局「も」が最適といえる。

次に，沼田善子「現代日本語のも』—とりたて詞とその周辺」1995『つくば言語文化フォーラム編』を見てみよう。沼田は「も」全体を「単純他者肯定（主張・断定・自著肯定かつ含み・断定・他者肯定）」の「も１」，「意外（主張・断定・自者肯定かつ含み・予想・自者肯定，他者肯定）の「も２」，「不定他者肯定（主張・断定・自者肯定かつ含み・断定（前提１・前提２）・不定他者肯定）」の「も３」にわけており，このうち問題の「も」は「も３」である。沼田は「『も３』」

を含む文は，談話の視点から考えると，その文での主張を積極的に相手に伝えようとするのではなく，その後に続く文を発話するためのいわば背景づくりをするような機能を果たすものであることが多い」「呼び水的機能」をもつものとして，

例19　春もたけなわになりましたが，その後，お変わりありませんか。

例20　夜もふけて参りましたので，そろそろこの辺でお開きにしたいと思います。

などの例文をあげている。この例文の「も」はさきの高橋1978や田野村1991の指摘で説明がつくものであるが，この文脈レベルで「も」を記述する必要があるという指摘は他の研究結果と異なる点である。ただし，適切な用例は見つからなかったが，例えば例19中の春もたけなわになりました」の文は，

例21　「いいお日和ですね」

「ええ，春もたけなわですね」

といった文脈中でも用いることができ，必ずしも背景，呼び水となる必要はないと考えられるが，「は」や「が」の場合と比べるまでもなく，たしかに談話，文脈レベルで見ることは有効な感じがする。それは，「も」の一種の談話管理につながる機能がうかがえるからである。すなわち，例19の「春もたけなわになりました」は「は」でなく「も」をとることで，「春」そのものの話題であることをマークせず，しかも「その後おかわりありませんか」へと「春たけなわ」であるコトガラを結びつけているのである。

また，例20では「夜もふけて参りました」がやはり「も」によって，コトガラを談話の焦点にすえることなく，しかもこのコトガラを「そろそろこの辺でお開きに～」という談話の焦点に付帯的に結び付けている。

例21も同様で，「春もたけなわですね」も「いいお日和です」という談話の焦点をじゃますることなく，しかもそのコトガラにより添う形で結びついている。そのためここで問題となる「も」の記述にはこうした一種談話管理的な考え方も有効であると思われる。

最後に，定例利之「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」(1995『日本語の主題と取り立て』益岡隆志，野田尚史，沼田善子，くろしお出版）を簡単にとりあげておく。ここでは「も」は次のように分類されている。

a．基本的なモ：田中が来る。佐藤も来る。

b．色々のモ：その日は天気もよかったので公園は賑わっていた。

c．通念のモ：夜もふけてまいりました。

d．当たり前のモ：「ああ腹がへった」「一日１食なら腹も減るだろう」

e．意外のモ：中学生も合格だ。

f．確定回避のモ：あの時は，たしか学生が10人も来ていたかなあ。

このうち当該の「も」はcにあたると思われる。c．の例文としては

例22　息子も5才になりました。

例23　しかし坂田もバカなことを言ったもんだねえ。

例24　しかし坂田も頭がキレルねえ。

があげられており，「これは，現実世界でありがちな事態に関する通念に他ならない。話し手はこのような通念との類似に支えられて，具体的な事態をモで表現できる」とし，具体的には，例22であると「〔世の中，時間がたつのは早いものだ〕を指示する1具体例であることを表す」例23なら「〔世の中バカは多いものだ〕という具合に通念は色々想定できる」とし，また例24を「しかし坂田も天才だねえ」は（バカだという皮肉表現でないとすれば）より不自然であるとのべ，その理由は「通念との類似が認め難いと思われる事態の表現には，こうしたモは使われない」ためとしている。そして通念のモは述部内には生起しないことも指摘している。

さて，まずここで気になるのは，「坂田も天才だねえ」ははたして皮肉でなければ不自然な文なのか，ということであるが，これは「天才というのはいるところにはいるものだ」と通念を変えればすむことである。問題は，同じような「も」の記述をめぐっているのに，田野村は「予想外の～までが」という意味だとし，定延は通念の一例として提示する意味としている点である。（ただし，この田野村の例文は定延は別の用法として分類している）この両者が一見正反対にみえる意見を提出していることは，問題の「も」を考える上で，興味深い。なぜなら，このことは，「通念でみれば，つまり総称的にとらえれば当然あてはまるが，特に総称化の対象とならなかった，個別的なものが，実は予想に反してあてはまること」というひとつのことを裏表で述べているからである。

しかし，いまひとつ問題がある。それは，定延のいう「通念のモ」にさらに説明が必要な点である。次の例文を見られたい。

＊例25　冬も寒いな。

＊例26　時のたつのも速いですね。

などの例では，これらの「も」の文は「冬は寒い」「時がたつのは速い」は，それぞれ通念といってよいが，「も」の文として意味的に成り立ちにくい。それは，「寒い」集合体には冬こそが唯一当てはまる要素であるため，また「速い」ものにはいろいろ限り無くあるが，その中で「時間」と並び称する，他の同類の要素

というのは見当たらないためである。一方これに対し，

例27　この映画もよくできています。

となると，勿論「も」の文としてなりたつが，「よくできている」ものはごく普遍的にみられ，しかも「この映画」と並び称することができるものは「あの映画」「その映画」，およびかなり具体的にいろいろ特定できるので，その結果小稿で問題の「も」の意味とはならず，基本的な列挙，並列の「も」の意味として解釈されてしまう。

また，例１～例３や，次の例では，命題が必ずしも普遍的ではなく，しかも主部の意味するモノと述部に関して共通し，しかも主部の表すモノと並び称することのできるモノが具体的に特定しにくい場合，当該の「も」の意味を実現しやすいと考えられる。例えば，

例28　人間も立派な芸術作品だ。

この場合は「人間」と並ぶ「立派な芸術作品」に該当するものが不明なので，「も」は基本的な意味から，当該の意味に近づく。これに対して

例29　ポスター／カレンダーも立派な芸術作品だ。

となると，「ポスター／カレンダー」が「立派な芸術作品だ」であると判定することに少々難しさがでてくるため，この場合の「も」は「まで」のような限界に近い意味となる。（これは田野村の「たての含み」に近い）また，一方で次のように「立派な芸術作品」として並び称することができやすいモノが主部にくると，基本の並列的な意味となる。

例30　映画も立派な芸術作品だ。

この場合，「映画」の代わりに「写真」であってもよいだろう。それに対して，

例31　彫刻／絵画も立派な芸術作品だ。

とすると，今度は本来芸術作品という「通念」があるため，「も」の添加，二番手のイメージとぶつかって，この文は意味的に成り立ちにくくなる。これに対し，この例31を

例31’　彫刻／絵画は立派な芸術作品だ。

とすると，もちろん意味的におさまりがよくなるが，それは確固たる通念であるからである。つまり，「も」は一般に主部が命題を通念として成立させる要素のうち，二次的，副次的なものであることも条件となっていることがわかる。従って，同じ通念でも話者の個人的な「通念」であると，「も」はより自然な感じが強まる場合がある。

例32　たまには映画もいいものだ。

「も」の二次的な性質は，ここにも現れていて，例32の文は「映画はいいものだ」と総称的にいっているのではなく，あくまで「たまにはいいもの」として映画をあげているにすぎない。

Ⅱ．まとめ

以上を振り返ると，一般的，および当該の「も」の記述の複雑さ，難しさのありかが見えてきたように思う。かんたんにまとめると，「も」は

①．一般にある命題をなりたたせる主部のモノとして二次的な立場のモノをとりたてる。

②．命題を満たす最適のモノが主部にくると，「も」の文は不可能である。

③．述部に関して並列可能な主部のモノが特定できると，「も」は並列，列挙の意味となる。この場合は「も」は「は」に準じた談話の焦点，話題を提供する機能をもつ。

④．並列可能なモノが特定できても，「も」に先行するモノがもっとも命題を満たす可能性が低い場合，「も」は「まで」のような最低限を表す意味となる。

⑤．並列可能なモノが特定できず，しかも命題を満たす最適のモノが主部にないために「も」の文が可能となると，その「も」は並列でも，最低限でもない，小稿でとりあげたような意味を表す可能性がある。

⑥．文脈レベルにおいて，「も」が並列や最低限度の意味を表さないと，その結果「も」の文は「は」の文に準じた談話の焦点命題を示したり，焦点を維持するような機能をもたない。そのかわり，焦点にそって焦点を維持することに協力する機能をもつ。つまり，談話，文脈レベルで焦点の命題に対し，理由や付帯的状況，などを「も」の文でサポートする。この場合に当該の意味として解釈されることが多い。

⑦．談話，文脈ですでに話者が意識している命題に「も」がつくことがあるが，これはあくまで⑥のような環境でみられると思われる。

今後は，以上の点について具体的な文脈，談話にあたって分析をすすめ，検証したい。

参考文献

1986　奥津敬一郎，沼田善子，杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』くろしお出版

1974　梅原恭則　「係り結びの現象について(1)——ハ・モの呼応をめぐっ

て――」『文学論藻』49　東洋大学
1964　工藤美沙子「ハとモ」時枝誠記・遠藤嘉基『講座現代語6，口語文法の問題点』明治書院
1940　佐久間　鼎「提題の助詞『は』と『も』」『現代語法の研究』1978『日本の言語学』第3巻　文法Ⅰ大修館に所収
1991　佐治圭三　『日本語の文法の研究』（第2部係り結び，「は」と「も」）ひつじ書房
1995　定延利之　「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡，野田，沼田1995に所収
1975　曽我松男　「係助詞『も』の構造についての一考察」『日本語教育』26
1978　高橋太郎　「『も』によるとりたて形の記述的研究」『国立国語研究所研究報告書1』
1987　橘　豊　「古文における『は』『も』の機能」『国文法講座3　古典解釈と文法――助詞の機能――』明治書院
1991　田野村忠温「『も』の一用法についての覚書――君もしつこいな」という言い方の位置付け――」『日本語学』10―9　明治書院
1995　つくば言語文化フォーラム編『「も」の言語学』ひつじ書房
1978　寺村秀夫　『日本語のシンクタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
1984　沼田善子　「とりたて詞の意味と文法――モ，ダケ，サエを例として――」『日本語学』3巻4号　明治書院
1995　沼田善子　「現代日本語の『も』―とりたて詞とその周辺―」つくば言語文化フォーラム編1995に所収
1995　益岡隆志，野田尚史，沼田善子『日本語の主題と取り立て」くろしお出版
1989　益岡隆志　「取り立ての焦点」『日本語学』9巻5号　明治書院
1930　松下大三郎「『は』『も』の一般の用法」『標準日本語法』中文館書店
1936　山田孝雄　『日本文法學概論』（第十九章　副助詞，第二十章助詞）宝文館出版